

博徒侠客から侍になった男——柴田小文治

神村ふじを

左沢原町あてらざわの称念寺の山門を入ると左側に立派な石碑が立っている。碑文は「柴田小文治勝之」。戊辰戦争で新政府軍と戦った山形県は左沢の博徒侠客ばくとしきょうかくの墓と言われている。

博徒侠客と一緒に書いたが、賭場を開いてその寺銭で生計を立てる博徒と、義侠任侠を建て前として世渡りする侠客とは概念が違う。でも、世情不安定な幕末の世にあって、出てくべくして出てきたのであって、今の世に照らし合わせれば、カジノのオーナーが警察公認の私設自警団を組織していたようなもので、簡単に言ってしまうえば、ヤクザの親分である。

口伝やエピソードをまとめた文献類を元に書いているので、歴史的な裏付けがないことをまずお断りしておきたい。

小文治の出生年は定かでないが、おそらく文政年間（1818～30）の初め頃でなかったかと思われる。生まれは下谷地郷大横村とあるから、最上川の三難所ごてん（碁点みかのせ、三ヶ瀬はやぶき、隼）の西側にあ

たる現在の村山市大字大横おおまきに生を得たようである。幼名を文吉と言った。

がたいのよかった文吉が村で相撲に興じていたとこと。その相撲の取りっぷりが村役人勝兵衛の妻おみよに気に入られ、月に一度の名主の会議に、名代として出席する勝兵衛とものものの伴者として付き添いを命じられた。

世情は混沌としており、地方においても窃盗、略奪が横行するなど、不安定極まりない状況であった。無頼の輩に要らぬ言い掛かりをふっかけられて難渋することがないように、勝兵衛は文吉を用心棒代わりとして連れ歩いたのであった。

こうした環境や谷地やち以北に勢力を持つていた大吉、直吉、太吉という三人の親分に大変可愛がられ、文吉は義理人情に厚い侠客として人間を磨いていった。

あるとき、世話になった親分の妾が不義密通を働いたと知り、不正を糾弾しているうちにその妾が川に滑落するという事件が起きた。文吉は、親分との義理を欠く顛末てんまつとなったため、生まれ故郷を離れ上州の大親分大前田英五郎の客分の身となった。

侠客としての仁義を身につけた文吉が小文治と名前を変えて山形に戻ったのは、嘉永年間（1848～54）の終わり頃であった。

小文治は大前田の親分から紹介を受けた風間村の金兵衛親分のところに身を寄せたが、金兵衛は、左沢は交通の要所、舟運による物資も行き交っており、庄内酒井藩との関わりも深いから景気

がいいはずだ。幸い佐藤屋という知り合いがいるので、そこで草鞋わらじを脱いでみてはどうかと熱心に勧めた。こうして小文治は左沢の住人となった。

最上川が蛇行して、その川べりに発達した左沢は、物資の集散地であった。左沢から上流は小型の小鵜飼こうかい舟で搬送する以外に方法がなく、米沢上杉藩の物資を積み置く蔵が立ち並んでいた。酒田からの鰯舟ひらたは左沢止まりで、荷の積み替え、荷卸しと朝から晩まで仕事が続いていた。

小文治が荷揚げ人足同士の諍いさかいの仲裁をしたのは、佐藤屋の客分になってから数日後だった。大前田の大親分から一目置かれていた小文治は、屈強な男どもの喧嘩を見事に裁いてみせた。その噂は瞬く間に広がっていった。

若い者が二、三人集まって、ぜひ子分にしてくれと申し出た。親分としての経済力や佐藤屋の客分であることを理由に断ろうとしたが、毎日のように若者が集まってきた。その輪は広がるばかりで、ひと月で30〜40名になったと言う。

小文治は、「弱い者いじめは禁物」「女と賭博に手を出してはならぬ」「口論は慎め」と三ヶ条を示して統制の掟とした。風体の悪い若者が町中から消えていった。左沢の治安が目に見えてよくなっていたのである。

慶応4年（1868）正月3日、旧幕府軍と薩長を中心とする新政府軍との戦いの火蓋が切って落とされた。鳥羽伏見の戦いである。

会津藩主の松平容保かたもちは京都守護職、また庄内藩は江戸市中の取り締まりを行い、江戸薩摩藩邸焼討ちの中心的役割を果たした。二藩とも薩長中心の新政府軍から大いに恨みを買っていたのである。

2月9日、新政府は一方向的に会津藩と庄内藩の征討を決定した。仙台より出羽国に入った新政府軍は天童藩に先導役を命じており、幼少の藩主に代わって家老吉田大八が代理で責任を負った。

庄内藩は、国を分けるような戦乱は避けたい意向であったが、家臣の声としては幕藩体制の堅持が大方であり、上層部は恭順か和平か抗戦か判断が揺れていた。

新政府軍にあつては、財政基盤が確立しておらず、戦費をまかなうために太政官札の発行や大坂商人の資金提供を頼りとしていた。そこで目を付けたのが幕府直轄地であった寒河江の柴橋代官所の年貢米である。

新政府軍は、王政復古の際徳川慶喜よしのぶに辞官納地を求めており、代官所の所有米は当然我が物と思っていたし、片や庄内藩は、江戸市中取り締まりの恩顧として村山領7万4千石は幕府から預地とされたものであり、争いになるのは当然の成り行きであった。

新政府軍の先遣隊が天童に入るとの情報を得た庄内藩は、先に中村次郎兵衛率いる100名の兵が代官所を襲撃し、年貢米2万3千俵余を酒田に下してしまった。これだけの米を下すには相当数の舟と人足が必要であつて、小文治は中村次郎兵衛からの依頼を受けて、舟と人足どもをまとめて

この仕事を請け負った。このときから庄内藩との深い繋がりが生まれたいらしい。

4月3日、天童藩家老吉田大八を先頭に、新政府軍先遣隊（天童藩130名、仙台藩70名、薩長・土120名）が強制接収のため柴橋代官所に到着した。新政府軍は守備の庄内軍を撃破するつもりであったが、既に庄内兵も米も微塵もなく代官所はもぬけの殻であった。（柴橋事件）

その後、庄内藩兵が潜んでいないかと左沢に来て、酒屋に押し入ったりして乱暴狼藉を働いており、左沢では新政府軍（官軍）を「敵官軍」と呼ぶようになった。

柴橋代官所の下役河野俊八は、幕府の禄を食む幕臣でありながら、代官山田佐金次が江戸にあって不在のため、新政府軍から郡司代格を命ぜられており、備蓄の金壺万両を献上していた。また、吉田大八とともに新政府軍の命の元に行動しており、庄内藩の恨みを買っていた。

4月26日、左沢と庄内藩との繋がりがや天皇の奸臣薩長に対する反感から（そうではないという見方があり後述する）、小文治は子分200名を引き連れて最上隊を名乗り、庄内軍中村次郎兵衛の配下になった。同日夜、柴橋代官所を急襲、役所を占拠したが、郡司代河野俊八は逃走。小文治は清助新田名主佐藤清助に匿われていた河野俊八を捕縛し直ちに庄内に護送、9月22日に毒殺されたと言う。

小文治の柴橋代官所襲撃の快挙は世間の高い評価を受けた。左沢では、敵官軍におもねる悪代官を成敗したように受け取られたことは想像に難くない。小文治は当然のことをしたまでとあくまで

謙虚であり、これからも庄内藩のために命を惜しんではならないと子分たちを諭したそうである。

小文治がなぜ庄内軍に与したかどうかは、何せヤクザの親分なので、手紙や文献はなく類推の域を出ないが、この戦のドサクサに紛れて一旗揚げようと目論んだことは容易に推察できるし、後藤嘉一著の『やまがた明治零年 山形商業史話』の中に、巷に伝わる噂と断りながらこんな一節がある。

天童藩は織田信長の血筋を引き継いでいながら、たった2万石の小藩で、幕府に冷遇されていると感じており、前述したとおり新政府軍の命を受け奥羽鎮撫の先導役を担っていた。その先頭に立っていたのが家老の吉田大八である。

小文治は天童城下のある妓楼の遊女に入れ込んでいた。ところがその女は吉田大八に惚れていて小文治を袖にしたため庄内軍に与したというのである。この辺がヤクザの親分らしく、どろどろしていて話としてはとても面白い。

柴橋代官所襲撃のあと小文治の最上隊は、農兵頭を務めていた谷地沢畑の素封家堀米四郎兵衛家を襲撃、兵器類を押収した。また、新庄藩の谷地北口陣屋を襲撃、最上川河畔に進出し、新政府軍の先兵となった天童軍と対峙、庄内軍とともに戦っている。

松嶺資料17巻には、「一、千石被下 一、御金百両米百俵御手当被下置也」とあり、百姓の小倅として生まれ、周りの人々の恩恵を受けて成長し、今酒井公から士分の待遇を受けるまでになっ

た。小文治には、忠義を尽くし酒井公のもとで大成したいという願いが強くあったようである。前にも述べたが、藩上層部に新政府軍とあからさまに戦う意志はなく、降伏恭順の姿勢を示したものの、全軍にその知らせが徹底しなかったために、一部で小競り合いは9月27日の鶴岡城開城まで続いた。

戦が収まると、小文治は左沢に戻り遊女屋を営んだと言う。実際の命日は不明だが、称念寺の碑文に明治15年7月29日とあり、命日だとすると70歳余で没したことになる。死因として毒を盛られたとする噂が伝えられており、波乱に満ちたその生涯から、恨みも憎しみも一身に背負ってきた博徒侠客の姿が垣間見える。

参考文献…『伝聞 小文治覚書』高橋欣二(2002)

『やまがた明治零年 山形商業史話』後藤嘉一(1967、山形県郷土資料復刊協会)

『天童人物伝』湯村章男(2018、阿古耶書房)

『高松村史』(1971、高松村史発刊委員会)

『大江町史 近現代編』(2007、大江町教育委員会)

